

森絵都著「みかづき」集英社 2016年9月10日刊を読む

1. 勝見の授業はまるで舞台のようだった。巧みな話術と腹からの発声で聴衆を引きつけ、最後の瞬間まで手綱をゆるめない。吾郎の指導法が「静」ならば、勝見のそれはまさしく「動」だ。生徒の内的な目覚めを持つ吾郎に対して、勝見は攻めて攻めまくる。
2. おもしろい。そんなにも正反対の勝見に、あるいは正反対だからこそ、吾郎は心惹かれた。自分にはないものをもつ同業者との、それは胸わく出会いであった。  
「じつは私、以前は証券会社に勤めてたんですよ」
3. その夜、生徒たちが去った教室の卓袱台で二人、勝見の妻が運んでくれる煮物や魚肉ソーセージの炒めものなどを肴さかなに酒をくみかわしながら、勝見は意外な過去を語った。
4. 「見えないでしょう？いやまったく、あれほど性に合わない商売だとは自分でも思いませんでしたよ。そりゃあ給料はよかったし、あのころは贅沢えんせいかんもしたもんですけど、いつもどこかに厭世観えんせいかんがありました。なんたって、会う人会う人、お客さんはみんな筋金入りの拝金主義者ですから。寝ても覚めても金、金、金、喜びも悲しみも金が運んでくる世界です。金持ちをもっと金持ちにするために生きているのかと思うとむなしくて、ノルマもきつくて、私、体を壊してしましまして。入院中に青臭いことを考えたんです。金より大事なもののってなんだろうって」
5. どうせ一度の人生ならば、金より価値のある何かのために自分を使いたい。転職を頭によぎらせた勝見は、大学時代、勉強教室で非常勤教師をしていたときのことを思いだしたのだと言う。
6. 「それまでの人生をふりかえって、あのころが私、一番充実してたなって。教壇に立つのが楽しくて、毎回なにかしらの手ごたえがあって、生徒たちからも勉強が楽しくなったのと言われて、ますますその気になって。塾教師の役目って、私、その気になればいくらでものびていく子どもたちの火つけ役になることだと思うんです。つまりはマッチですね。頭こすって、こすって、最後は自分が燃えつきて灰になったとしても、縁あって出会った子たちの中に意義ある炎を残すことができたなら、それはすばらしく価値のある人生じゃないかって。もう私、すっかりカーッとなっちゃったわけです。入院が長引いて金がかかったもんで、とんだ安普請からの出発になりましたけれどね」
7. 「なるほど。価値のある人生、ですか」  
女三人にからめとられ、運命の急流に抗うすべなく今に至る吾郎には、自らの意志でここまで漕ぎつけた勝見がひどくまぶしくも感じられた。  
「しかし、世間は塾について懐疑的ですよ。むしろ、受験競争の煽り屋みたいと言われて、うち

の奥さんなんかは年中きりきりしていますけど」

「言わせておきゃあいいんです。私はね、受験競争を誰が煽ったとか、そんな議論自体がナンセンスだと思ってるんですよ」

8. 酒が進むにつれて勝見はますます雄弁になった。

「いずれこうなることは、学制が敷かれたときからわかりきっていたんです」

「学制？」

「<sup>むら</sup>邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す。明治5年に発布された学制より以前、日本人は厳格な身分制度のもとに暮らしていたわけですよ。原則的に男は父親の仕事を継ぎ、女は父親と同じ職の男に嫁いだ。産道をぬけたときには社会的地位が決まっていた。学制は、そのくびきからの解放であったからこそ画期的だったわけです。教育を受ければ誰でもいい職につける、自らの手で人生を切り拓いていける、と。そこで初めて庶民は自由なるものを手中にした。誰もが横一列の出発点に立ったら、そりゃあ、競争が始まるのは必至です。究極、受験競争がけしからんと言うのなら、明治5年以前の封建社会に戻るしかない」

9. 「たしかに。努力次第で変えられる序列なら、そりゃあ、誰だって、いい暮らしをしたいと願いますよね」

10. 「掃除機をほしがると、世の奥さん方に言えますか？そこに、手をのばせば届く高等教育があるのに、求めるなど誰が言えますか。どんだけきれいごとをならべたところで、貧乏暮らしからぬけだすには、まずは勉強するしかないんです。だとしたらせめて、私は彼らに意味のある勉強をさせてやりたい。試験対策をつめこむだけの授業に可燃性はありません。火ですよ。火。彼らの向学心を永久不変に燃えあがらせる、それぞれ自分の使命と私は思っています」

11. その言いきりのさわやかさに吾郎は胸を熱くした。吾郎のそれとは一風ちがうながらも、勝見には確固たる独自の教育観がある。千明同様、借りものではない自分自身の信念をもっている。それを上下の別なく語りあえる平らかな場こそが塾なのだとしたら、そこにはたしかに無限の可能性がひそんでいるのではないか。

12. 「吾郎先生、どうです、一つ一緒に組んでみませんか。吾郎先生の授業を見学して、私は自分にはないものを感じました」

「いやいや、ぼくのほうこそおおいに感銘を受けました」

「正直、今後も一人きりでやっていくには不安もあったんです。また病気にでもなったらハイそこまで、誰も代わっちゃくれませんか」

「そりゃあ、勝見先生に代われる先生はそうそういないでしょうね」

「またまた何をおっしゃる！」

13. 酔いがまわるにつれて二人はすっかり打ちとけ、互いに互いをもちあげながら調子にのりつづけ、

勝見の妻が補充を求めて酒屋へ走るころには、しかと肩を組みあわせて勝見自作の塾歌を熱唱していた。

#### 14. 学べや 学べ 八千代の里

倒壊寸前の 我が学舎で  
高々てのひら天へと掲げ  
知識をつかめ 明日へ羽ばたく  
でかでか鼻の穴ふくらませ  
知恵を吸いとれ、未来を照らす

P71 ~ 74

#### <コメント>

学習塾業界の 30 年の歴史を小説にして頂いたとしか、私には思えない。森先生の「みかづき」は、学習塾の先生の必読書と考える。各年代における、学習塾の取り組んできたテーマやこれから取り組まなければならない課題が明確に示されている。各学習塾や塾の研究会では、「みかづき」をテキストとしてもう一度自らを省察することが大切と思われる。

— 2016年8月25日(木) 林 明夫記 —